徳法寺

盛衰

杉谷 淨

今年の九月、石川県立歴史博物館で開催されていました夏期特別展「いしかわの霊場」に行ってきました。この特別展では「多くの信者の参詣を許す開かれた聖地」を「霊場」と定義していました。「霊場」という言葉には「修行場」のニュアンスがあるので、修行をしない浄土真宗では使われることがありませんし「聖地」という言葉も真宗には馴染みのない言葉ですから、真宗王国と言われる石川県にこのような場所があるのかと思われる方もいらっしゃるかもしれません。ですが、蓮如が吉崎に来る以前の石川県では、親鸞系念仏よりも真言宗や曹洞宗の方が優勢でした。ですからこの特別展は、古代から中世にかけての石川の仏教史を見ることができるものとなっていたのです。

平安時代の前期から石川県内で一大勢力を誇っていたのが、空海以前の古密教の教えを伝える中能登にあった石動山（せきどうさん、いするぎやま）です。奈良時代、日本では仏教と山岳信仰が結びついた山林仏教が盛んで、日本各地に修行場ができましたが、石動山もその一つでした。石動山周辺からは、古密教の儀式で使われていた銅三鈷鐃（どうさんこにょう）という銅鑼（どら）が付いた法具がいくつか見つかっており、今回も展示されていました。僧侶の修行場から、多くの信者が参詣する霊場へと整備されたのは、平安時代後期と思われます。最盛期の鎌倉時代後期から室町時代には三六〇余坊を数えたとされ、能登を代表する寺院でした。明治以前は神仏習合が一般的でしたから、様々な神仏を祀った寺院・神社・仏塔や僧侶の住いである院坊などが山頂の伊須流岐権現大宮社殿を中心に建てられていました。これは当時としては全国屈指の規模であり、加賀の白山、越中の立山と並ぶ北陸を代表する霊場でした。当然、これを支えた多くの信徒がいたと思われますが、今は寺院の痕跡しか残っていません。

景勝地として知られる珠洲岬にある山伏山（やまぶしやま）山頂には美穂須須美命（みほすすみのみこと）を祀る須須神社奥宮があります。「ススミ」はのろしの古訓ですから、海からよく見えるこの山は、古代から海路の安全のために、のろしがあげられていた場所であることが分かります。山伏山という名前は、ここが山林仏教の聖地であったことを示すものです。江戸時代以前には神社と並んで高勝寺がありました。現在は廃寺となっていますが、かつてこの寺にあった阿弥陀仏像は他の寺で守られており、今回展示されていました。

現在でも続いている寺院としては、穴水町にある白雉（はくち）三年（六五二年）に孝徳天皇によって建立されたと伝えられている真言宗の古刹白雉山明泉寺があります。「明泉寺絵図」には二〇を超える建造物が描かれていることから、奥能登を代表する寺院であったことは間違いありません。戦乱による火災などでその多くを失ってしまいましたが、今でも平安時代の仏像や、鎌倉時代～室町時代の石造遺物など多数を見る事ができます。劣化により崩落していた五重塔も昭和四十五年に修理され、往年の姿を偲ぶことができます。

いずれの「霊場」も、全盛期には衰退することなど想像もしていなかったでしょうが、どのようなものでもいずれは衰えるという諸行無常は、仏教の基本的な教えです。この教えを心に刻むためにも、次はこれらの場所へ実際に足を運んでみるつもりです。

石動山古絵図　室町～安土桃山時代

律宗

杉谷　淨

今回は、徳法寺で行っています、仏教講座で取り上げました律宗について書かせていただきます。

中国では仏教を、戒（かい、戒律）・定（じょう、禅定）・慧（え、学問）の三学に分けて学んでいました。この中の戒を日本に伝えたのが鑑真（６８８～７６３年）で、鑑真の唐招提寺を中心とした流派が律宗になります。しかし、厳しい戒律は日本の仏教に定着することはなく、律宗は衰退し、鎌倉時代になると唐招提寺に僧侶が一人もいなくなってしまいます。戒律を軽視する中で、宗派を問わず金銭欲や色欲に溺れる僧侶も多く現れたため、律宗を再興することで本来の僧侶の姿を取り戻そうとする僧侶達があらわれました。

私生児として生まれながらも宋に渡り戒律の復興に取り組んだ俊芿（しゅんじょう、１１６６～１２２７年）は、厳しく自身を律する高潔な人柄から、特に皇室から深い帰依を受けました。俊芿の泉涌寺は皇室の菩提寺となり、多くの天皇陵墓が造られています。寺院の中でも「御寺」と呼ばれる特別な地位にありましたが、明治時代の神仏分離により天皇家菩提寺としての地位を失い、現在は六十二カ寺が所属する真言宗泉涌寺派本山となっています。

学律房覚盛（がくりつぼうかくじょう、１１９４～１２４９年）は、戒律を守っていない戒師による形骸化していた授戒を否定し、戒師を介しない授戒を行うことで律宗の立て直しを図ります。弟子の一人が一夜にして男性から女性に変わったことを契機に、尼僧の授戒も積極的に行いました。唐招提寺を復興し、中興の祖とされています。しかし、その後宗勢力は振るわず、現在、唐招提寺は三十九か寺が所属する律宗の本山となっています。

覚盛の仲間の一人である思円房叡尊（しえんぼうえいそん、１２０１～１２９１年）は、称徳天皇が建立した後荒れ果てていた西大寺を復興し、ここを本拠地として律宗の復興を行います。叡尊は困窮者を救済するという菩薩としての生き方を戒律の中心に据えると、非人といわれていた疥癩（かいらい）や障がいを持つ人達を菩薩として敬い礼拝の対象とします。法要を行うことで布施を集めると、それを基として食料や生活物資を施しました。非人以外の生活困窮者には仕事の斡旋もしました。宇治に橋を造った際には、魚を取らなくても生活できるようにと茶の栽培を教えています。

弟子の良観房忍性（りょうかんぼうにんしょう、１２１７～１３０３年）は、当時希少であった風呂で非人に垢すりを施すことを、僧侶の修行と定めます。さらに、誰でも利用できる無料の診療所や薬局も作りました。下の図はこのような施設が並んでいる忍性の鎌倉極楽寺の様子です。様々な職人集団を組織すると、その土木技術で各地に橋や港湾施設を作り、その利用料を徴収して施設の運営費にあてました。さらにその弟子たちは、資金調達のために日本初の銭湯を作ると、宇治で採れた茶を湯上がりに飲むことを勧め、茶の消費拡大にも努めています。今でも関西地区には、この時用いた石風呂がいくつも残っています。この様な社会活動によって、身分を問わず多くの人々から支持を受けた西大寺系律宗ですが、次第に勢力を失ってしまい、現在、西大寺は九十一カ寺が所属する真言律宗の本山となっています。

これら律宗系の僧侶達は、鎌倉時代には親鸞や道元、日蓮などよりもはるかに多くの弟子と信徒を抱え、社会にも大きな影響力を持っていましたが、教団が衰退してしまったために、彼らの存在も歴史の中に埋もれてしまい、その名を知る人もほとんどいなくなってしまいました。しかし、今から八百年も前に、この様な僧侶たちがいたことを少しでも多くの人に知っていただければ嬉しく思います。

極楽寺伽藍古図

ガラケーについての話

杉谷伊吹

皆様こんにちは。いつも私は気難しいことばかり書いてきましたが、今回は軽い内容の雑談にしようと思います。暇つぶし程度にお読み下さいませ。

ギリギリ現役ではあるものの、既に旧時代の存在と化した折り畳み式の携帯電話、人はそれを「ガラケー」と呼びます。それに対し、時代の覇権を握り世に蔓延るのは「スマホ」であります。そして、ある日私は疑問に思いました。「スマホ」の正式名称は「スマートフォン」で、日本語に訳すと「賢い（＝スマート）電話（＝フォン）」ということですから、なるほどと理解できる意味の言葉です。

では「ガラケー」とは一体何の略で、どのような意味なのでしょうか？「ケー」の部分は携帯電話の略だと安易に予測できます。じゃあ「ガラ」とは一体？「ガラクタ」だと悪口が過ぎるし、模様などの「柄」の意味では無さそうだし、などと思考を巡らせてもなかなか予測が立ちません。そんな時は仕方ないのでスマホを取り出しいざ検索。出てきた答えは思いもよらぬ「ガラパゴス携帯」でした。言葉の由来としては、まず「ガラパゴス化」という表現があり、その元となったのが「ガラパゴス諸島」という、南アメリカ大陸からおよそ千キロ、赤道直下の太平洋上に浮かぶエクアドル領の島々です。島々の周り千キロ以内に陸地がないことから、外部から隔絶された閉じられた環境の中で、生物は独自の進化を遂げたそうです。これになぞらえて、他の世界では見られないような（もしくは通用しないような）独自の進化を遂げることを「ガラパゴス化」と表現するのです。

世界中に携帯電話が普及していった中で、日本の携帯電話は、機能や仕様において他の国の携帯電話とは異なる方向へ進化を積み重ねていきました。他国の携帯電話が、電話とメールに特化していったのに対して、日本の携帯電話は、絵文字😊・ワンセグ（移動型および携帯型端末用テレビ機能）・おサイフケータイ（近接型無線通信方式による決済サービス）・赤外線通信といった、通信以外の様々な機能を持つようになったのです。当然、その分だけ高価格になるのですが、販売奨励金による戦略的な販売価格の割引によって、一時期は販売店の納入価格を下回るほどの安価で提供されていたこともありました。ですから、海外では高額所得者が買うような高機能の携帯電話を誰もが手に入れることができたのです。

その後時代は進み、携帯電話というよりは、携帯パソコンと呼べるほどの圧倒的な高性能と多機能を備えた「スマートフォン」が、世界の統一規格として徐々に市場を上塗りしていきます。そして、通信環境が高速大容量なものに変わっていったことも影響して、日本独自の「ガラパゴス携帯」は時代遅れのものとして、次第に市場から追いやられていきました。ちなみに通信方法が３Ｇ回線だけのガラケーは、ソフトバンク・ワイモバイルのものは二〇二四年一月末に、ドコモのものは二〇二六年三月末に電波が使えなくなります。また、ａｕはすでに３Ｇ回線のサービスを終了しています。４Ｇ回線が使えるガラケーはおそらくあと数年から長くて十年程度は使えますが、それもいずれ終わりを迎えます。５Ｇ回線を使えているガラケーは、実はガラケーの姿をしたスマホです。

今回は「ガラケー」について書いてみました。身近に使っている言葉であっても、調べてみると意外と知らないことが沢山出てきました。今後も仏教以外でも、興味がわいた事について書かせていただきますのでよろしくお願いします。

話題になった巨大なイカ

徳法寺からのご案内

心の相談室

毎月第四土曜日の午後三時から午後五時まで

横安江町商店街にある**「いちょう館」二階**にて真宗大谷派の僧侶による「心の相談室」を開いております。個室で相談をお受けします。仏事はもちろん、家庭や職場、学校など、どのようなお話もお聞きします。相談は無料です。予約も必要ありません。相談内容は一切外に漏れることはありませんので、お気軽にお訪ねください。

サンガ茶話会

毎月第一木曜日の午後三時から午後五時まで

横安江町にある東別院敷地内**「真宗会館」一階囲炉裏の間**にて「心の相談室」スタッフによる「サンガ茶話会」を開いております。座談形式となっています。僧侶やその場に集まった方々とお話しませんか。いろいろな方に聞いてほしい話、聞いてみたい話がある方はお気軽に参加してください。他の参加者の話を聞いているだけでも構いません。参加は無料です。予約も必要ありません。出入りも自由ですので、途中参加、途中退室でも大丈夫です。お茶とお菓子を用意してお待ちしておりますので、お気軽にご参加ください。

徳法寺 仏教入門講座

毎月二十一日午後七時半より

講師　徳法寺住職　杉谷淨

十一月　鎌倉仏教 十八　鎌倉神道の成立

十二月・一月・二月はお休みします。

三月　足利仏教 一　民衆仏教誕生の背景

平安時代、僧侶によって、全ての神は仏の生まれ変わりであるという本時垂迹（ほんじすいじゃく）思想がつくられました。実はこれが神道の始りです。これが鎌倉時代に、天台系の神道と真言系の神道に発展整理されます。これら仏教系神道以外にも、伊勢神宮外宮の度会（わたらい）氏によって神社側からの神道である伊勢神道も登場しました。十一月は鎌倉時代に誕生した神道を中心に見ていきます。

来年からようやく足利時代に入ります。都は鎌倉から京都に戻りますが、公家に権力が戻ることはなく、各地で武家による勢力争いが起こるようになります。これによって地方分権が進み、次第に民衆が時代を動かすようになっていきました。

参加費はお賽銭のみです。どなたでもお気軽にご参加ください。

表題揮毫　中田　八千代

徳法寺　石川県金沢市野町二丁目三二番四号

℡　０７６（２４１）５２１９

ホームページ　http://tokuhou-ji.com

令和六年 年忌法要のご案内

一周忌法要	令和五年死去
三回忌法要	令和四年死去
七回忌法要	平成三十年死去
十三回忌法要	平成二十四年死去
十七回忌法要	平成二十年死去
二十五回忌法要	平成十二年死去
三十三回忌法要	平成四年死去
五十回忌法要	昭和五十年死去